コンラッドの短篇「密告者」について

秋　葉　敏　夫

たとえば飛行機の中でも、列車の中でもよい。隣に座った人が、なにか自分の体験か人から聞いたことを話し出したとする。その話は人間の出来事として現実味があり、聞き手は自然に引き込まれる。話し手は興味深く語るうちに、少しも押し付けがましくなく注釈や解説を加えることができる。その話し手は、さらに、自分の意見をそれとなく差し挟むことも可能である。物語における「語り」の基本は、まさに、こういう状況に根差しており、多くの作家にとって、「自然な語り」の模索は、1つの解決案として、「語り手の登場」にたどりつく。

小説とは、「ある長さを持つ、散文で書かれた虚構の物語」(1)である。つまり前の例で、現実の体験あるいは出来事を虚構、作り物に換えれば、話し手の利点はそのまま小説における「語り手」採用の利点となる。たとえ作品の創造主であれ、作家が神と同じように、ものごとすべてを知り尽くす「全知」の立場は、いかにも不自然だろう。「自然な語り」に悩む作家にとって、「語り手」は、作家の意欲を失うことなく作家自身の身代わりとなる、いわば救世主みたいなものである。

現代イギリス小説の先駆者の1人、ジョウゼフ・コンラッド(1857～1924)は、時流を抜きん出る鋭い政治認識と人間心理の精緻な解剖などで有名である。そのコンラッドは、また、さまざまな小説技法を試み、開拓した作家でもある。そこには、たとえば時間の逆転や、人物と場所の象徴性などに加え、物語の「自然な語り」から注目された、「語り手」の採用が含まれる。つまり、コンラッドは多くの作品で「語り手」(1人称の「私」

も入る）を登場させ、その便利さを器用に活用した。たとえば、ほんの佳作にすぎない短篇「青春」（'Youth,' 1898）でも、彼は中年の「語り手」マーロウを使い、その青春時代の思い出深い体験を通して、青春期の苦難の意味とこの時期の短さ、はかなさを、効果的に描き出す。そして、物語のクライマックス部におけるマーロウの言葉、「ああ、青春の魅力！ああ、燃える船の炎よりまばゆい、青春の輝き、それもやがては、海より残酷、無情、厳格な時の流れで、消えてゆくのがおちなのだ」(2)というのは、まさに作家コンラッドの思いそのものである。処女作『オールメイヤーの阿房宮』（*Almayer's Folly*, 1895）の冒頭場面、主人公オールメイヤーが川の流れを見つめながら、昔の思いに耽る場面を持ち出すまでもなく、「時間の経過」はコンラッドの繰り返す主題の１つになっている。「青春」の語り手マーロウは、その青春期の特異な体験で、聞き入る一座の人々を魅了し、作家コンラッドのものに違いない、その哲学を無理なく披露し、納得させる。そして読者も、マーロウを取り巻く一座の仲間入りをして、彼の話を楽しむとともに、あとはその余韻に浸ることになる。

この小論で扱う作品「密告者」（'The Informer,' 1906）も、いわゆる「全知」の作者が物語の「語り手」となって、話が進められる。つまり、作家の顔はとりあえずそこに隠れてゆく。語り手の「私」は、親しい友人の紹介で、過激な政治パンフレットの執筆者で革命家、Ｘ氏の訪問を受ける。Ｘ氏は衣裳のたしなみもよく、物腰の洗練された、立派な人物である。「私」は、読者の興味を誘うかのように、前置きとして、彼を次のように説明する。

・・・テーブルクロスの上に見える、彼の頭と上半身は少しも動かなかった。この火付け役、この偉大な扇動者は、人間的暖かさや動揺をまったく示さなかった。彼の声はかすれ、冷たく、低い口調は単調に

聞こえた。彼は話好きな人間だとは思えなかった。しかし、その優雅な落ち着いた態度で、彼はいつでも話を止められるし、また続けられるように見えた。

しかも彼の会話は、けっして平凡ではなかった。・・・テーブルで向かい合って彼と静かに話していると、私には少し興奮してくるものが感じられた。(3)

しばらくすると、「私」はX氏とときどき会食するようになる。そしてある晩、X氏が「私」に話す出来事が、作品「密告者」の大部分を占める。そこでは、語り手の「私」は、X氏の話に耳を傾ける「聞き手」に変わってゆく。そして読者も、この「私」の仲間入りをするのである。たとえ読者は、「私」のように質問することはできないにしても。

1905年12月、作家コンラッドは、初めて無政府主義者の登場する短篇「無政府主義者」('An Anarchist,' 1906) を完成し、続いて「密告者」の執筆に取り掛かる。この作品も、無政府主義者の世界を扱う、およそ8,500語ほどの短篇で、遅筆のコンラッドにしては筆は比較的速く進み、翌年の1月には出来上がる。これは最初、1906年、アメリカの雑誌「ハーパーズ誌」(*Harper's Magazine*) 12月号で発表され、ほぼ1年半が経過したあと、他の5編の作品とともに、短篇集『作品六つ』(*A Set of Six*, 1908) に収録された。『作品六つ』は、主題や人物、舞台などの統一が見られるものではなく、およそ同じ時期の作品を集めた短篇集にすぎない。

コンラッドは、革命運動とか無政府主義者の活動に、大きな興味を抱いてくる。もともと彼は政治に深い関心を持つが、それがいつ頃始まったのか、また何故なのかは、はっきりしない。少なくとも、彼の無政府主義者を扱う作品は、1905年の年末から書かれてゆく。そして「密告者」は、直前の「無政府主義者」とともに、この作品群の傑作長編『密偵』(*The Secret Agent*, 1907) の先駆けとなった。「密告者」では、短篇小

説の特徴として１つの出来事が扱われ、余分を削ぎ落とした「凝縮と強調」の効果によって、作家コンラッドの見つめる、無政府主義者の世界の実態とその欺瞞が、端的に描き出される。

ここで、作品「密告者」のストーリーに入ってゆこう。X氏は、無政府主義者が属す秘密結社の中心人物である。彼の話すところによると、ハーミオン通りのアジトで謀られる計画が、必ず失敗に終わってしまう。その建物は、革命運動に共鳴する、裕福な女性の提供物である。通りに面した建物は印刷所の体裁を取っており、怪しい気配は少しもない。X氏は、そのアジトに出入りする無政府主義者のなかに、警察のスパイがいるとにらむ。そして彼は、別のグループが警官に変装した、偽の襲撃を計画し、実行するのである。

ハーミオン通りのアジトでは、得体が知れない無政府主義者セヴリンと建物を提供した上流階級の婦人が、見たところ恋仲になっている。そして例の偽の襲撃のとき、セヴリンはその女性を助けるために、警察のスパイである自分の正体をさらけ出す。ところが婦人は、無政府主義者のセヴリンを愛しており、彼の窮地を救うようなことはしない。セヴリンは、彼女がそういう自分を愛しているのに、気付いていなかった。つまり、オズボーン・アンドレアスが書くように、「彼らはただ単に、革命ドラマのお互いの役割を愛していたにすぎなかった」(4)のである。結局、セヴリンは毒を飲んで自殺し、女性の方は修道院に入ってゆく。

それはまさに、「革命ごっこ」のなかの「恋愛ごっこ」である。そこに、「幼稚な」という言葉を付け加えてもよい。その恋愛の破綻から判るように、彼らはともに相手を誤解していた。二人とも、目先のことに心を奪われ、相手の実体、真のすがたを見ていないのである。ここでの「語り手」X氏は、その事実を拡大し、他に当てはめようとは考えない。しかし、その背後には作家コンラッドがいるわけで、無政府主義者の多くは彼らと同じ短絡な思考の持主だという、批判が暗示されているように思

える。

ただし、事件の経緯を物語るX氏は、無政府主義活動に屋敷を提供する、例の裕福な女性を攻撃する。事件の話に移る前で、X氏は言うのである、「怠惰で利己的な階級の生活は、すべて見せかけの思案や言動が問題なので、その階級は、真の運動やごまかしのない言葉の、力と危険を理解することができない」(5)と。彼は続けて、その特徴として、「これやあれへのアマチュア精神、そしてもう1つは、暇をつぶし、自分自身の虚栄心———あさっての思想に遅れないという愚かな虚栄心———を満たす、愉快なほど簡単な方法なのだ」(6)と主張する。X氏は、革命運動に対する有閑階級の表面的な心酔ぶりを酷評したあとで、その1例として、偽の襲撃事件を話し始めた。

だから、物語のクライマックス部で、セヴリンがみんなを裏切ってきたのは「信念から」だと告白するとき、それは例の女性に向けての厳しい批判になっている。この部分の「語り手」X氏の心情を察すると、まさに罵倒と言ってもよい。そしてその言葉が、彼女の面前で3度も繰り返されるが、彼女自身、意味がよく分からない。それは誰も説明できないことだと、X氏は穏やかに慰める。しかし事件を話し終えたX氏は、彼女に対する痛烈な駄目押しの言葉を忘れない。

「でも、その若いご婦人は、どうなったんですか」　私は尋ねた。

「本当に知りたいのですか」　毛皮のコートのボタンを注意深くかけながら、X氏は答えた。「白状しますと、悪いと思いながらも、セヴリンの日記を送ってやりました。彼女は世間から身を隠しました。それからフローレンスへ行き、その後、修道院に入ったのです。次はどこへ行くのでしょうね。そんなことは、どうだっていいんです。思わせ振りな！　そう、思わせ振りな行動！　あの階級の単なる表面的な言動にしかすぎません」(7)

ところが、この生粋の扇動家、X氏に対しては、語り手の「私」が、強い疑念と嫌悪を抱いている。X氏は「私」と同じように、ブロンズ像や陶器に大きな興味を持ち、芸術への造けいが深い。また、彼の服装やマナーは洗練され、食物の好みも優雅である。つまり、彼の身に付けている「上品さ」は、自ら放逐しようと狙う資産階級のものと、少しも変わらない。「無政府主義者が成功によって駄目になっている、X氏のジレンマは、この物語の見事な皮肉的筆致の１つである」[8]と、ロレンス・グレイヴァーは書く。X氏はそのことを自覚していないし、悩む気配は毛頭ない。そしてここでも、語り手の「私」の背後に、作家コンラッドのすがたが見えてきて、革命運動への疑念や欺瞞が強く提出されることになる。「私」は、いわば読者の共感を得ようとするかのごとく、次のような質問をしない訳にはいかない。

私は突然、大衆のつぶやきが聞こえるように思えた。優雅なレストランのお祭り騒ぎの騒音と食器の音を越えて、腹をすかし暴動に移ろうとする、大衆のつぶやきが。

私の性格は印象を大事にし、想像的であると思う。私はここの数多い電灯の間に、やせた顎とぎらぎらした眼で一杯の、誰もが困惑する暗黒の場面を想像した。だが、どういう訳か、私はその場面に、怒りを覚えた。とても落ち着いており、白いパンをちぎっている、あの男を見て、私はすごくいらいらした。そして私は、大胆にも尋ねたのだ。何故なのか、彼が反乱と暴動を説いてきたヨーロッパの飢える労働者階級が、この堂々たるぜいたくな生活に、憤慨していないのは何故なのかと。「このすべてに接してです」 私ははっきり指摘した。その部屋をちらっと見回し、夕食時たいてい二人で一緒に飲むシャンパンの壜を見つめて。

彼はじっと動かなかった。[9]

短篇「密告者」は、けっして佳作と言えるようなものではない。その証拠として、登場人物の性格はどれも平板だし、「語り手」の観察は表面的にならざるを得ない。重要人物の心中の葛藤は、少しも描かれないのである。作家コンラッド自身、短篇集『作品六つ』に収録されたものについて、「それらは研究ではありません———何の問題にも触れていません。それらは、ただ興味本位のために、全力を尽くした物語にすぎません」[10]と、出版社宛ての手紙に記すのである。およそ15年後の全集に載せた「作者の覚え書」でも、執筆の契機やその背景などについて、他の作品では言及されるのに、この「密告者」にはほとんどない。出来上がった作品以外、コンラッドはあまり覚えていないのである。

それにしても、中味の薄い短篇「密告者」では、2人の「語り手」の役割が重要性を増してくる。それも、語られる物語への現実味や信頼性というより、彼らの注釈や意見の点である。たとえば、批判される人物がほとんど同情の余地なく扱われるのは、何故なのか。また、X氏のように、批判する人物が別の観点から批判されるのは、何故なのか。2人の「語り手」の背後に、作家コンラッドの眼が輝いていて、無政府主義者の世界を厳しく注視しているからである。そしてその世界に対する、彼の疑念と嘲笑は非常に強く、結果的に、その態度が作品全体を覆っていると考えられる。無政府主義活動に携わる者で、短篇「密告者」の登場人物より、複雑な性格を持ち、心理的葛藤に苦しむ人間を見るには、次に着手する長編『密偵』の完成を待たなければならない。

NOTES

テキストは、Joseph Conrad: *A set of Six*, (Dent's Collected Edition) (1954; rpt. London: J.M.Dent and Sons, 1961) を使用した。後註における頁数はそれによる。

(1) E. M. Forster: *Aspects of the Novel* (London: Edward Arnold, 1960), p.8.

(2) Joseph Conrad: 'Youth,' 'Heart of Darkness,' and 'The End of the Tether' (Dent's Collected Edition) (1954; rpt. London: J.M.Dent and Sons, 1961), p.30.

(3) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p.76.

(4) Osborn Andreas: *Joseph Conrad, A Study in Non-Conformity* (London: Vision Press Ltd., 1962), p.100.

(5) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p.78.

(6) *Ibid.*, p.78.

(7) *Ibid.*, p.101.

(8) Lawrence Graver: *Conrad's Short Fiction* (1969; rpt. California: University of California Press, 1971), p.141.

(9) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p.77.

(10) Gerard Jean-Aubry: *Joseph Conrad, Life and Letters* (London: Heinemann, 1927), Volume II, p.66.